

前頭葉刺激に重点をおいた認知リハビリテーションの効果

—開始後約1年を経過して—

西 幸宏、 宮島 千鳥、 村田千恵

医療法人 聖志会 渡辺病院

【目的】認知症の予防には、習慣的な運動や趣味に関与した社会活動の有無が、その発症率に影響するといわれている。また金子らは、前頭葉機能を活性化することにより、軽度認知機能障害の有する患者の認知機能の低下を対照群に比して有意に抑制できたと報告している。当院の通所リハビリテーションにおいても平成20年7月から利用者に対して前頭葉を賦活する認知リハビリテーションを開始した。今回、開始後約1年経過したこともあり途中経過ながらもデータを集積・分析して報告したい。

【方法】通所リハビリテーションを週1回以上参加している利用者15名中認知リハビリテーションを少なくとも6ヶ月以上利用した11名を対象とした。対象者11名（男性2名：女性9名）、平均年齢：76.5才。軽度認知機能障害、認知症を有する利用者。HDS-R：20.2±3.8点。観察期間：平成20年7月1日から平成21年5月11日。内容：①指体操 ②オセロ ③しりとり ④紙コップとり ⑤タワーくずし ⑥ハンドベル演奏⑦合図でポーズ⑧爆弾ゲーム。参加前と現在のHDS-Rの点数を算出し、ウイルコクソン順位和検定を用いて有意な変化の有無を検定した。

【倫理的配慮】利用者には本研究の主旨と個人が特定されないように配慮を行う旨を口頭にて伝え承諾を得た。

【結果】4月30日のHDS-Rの平均点数19.9±5.1点であり、開始前の点数との間には有意な変化が見られなかった。（ $p=0.6418$ ）

【考察】少なくとも認知リハビリテーション開始後1年経過しているが、利用者においては、有意な低下が見られなかった。この認知機能低下の抑制は、認知症が慢性の進行性の特性をもつことから、少なくとも我々の認知リハビリテーションが何らかの影響を及ぼし、認知機能の改善、もしくは維持した可能性があると思われる。